
桜の名残を

紗妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の名残を

【Zコード】

Z6575A

【作者名】

紗妃

【あらすじ】

（本文より……）『申し訳なかつたと思える人の心が残つてゐるのなら、悔やむ心が残つてゐるのなら、どうして一瞬、……そう、ほんの一瞬だけ躊躇つてはくれなかつたのかー弁護士が言つ、奴等の心にあるはずの人間の心に、『あの時』気付いてくれたなら……』

…』

「申し訳ありませんでした。とんでもないことをしてしまったと、心から悔やんでいます」

子供を持った経験などないであろう若い弁護士が、長テーブルの向こう側、すまし顔で、被告の言葉を代弁している。

「できることなら、ご両親と、……それから、相手の子に会って謝りたい。『めんなさいって……』」

薄暗い取り調べ室。担当刑事の前で神妙に頭を垂れ、少年達は言葉少なに、そう言つたのだそうだ。一人の人間の命を奪い去り、三ヶ月余も素知らぬ振りを決め込んで日常生活を送っていた少年達の、それが、謝罪の言葉だそうだ。

奴等が溜まり場としていたゲームセンターの前を、その日、たまたま通り掛かつただけの、面識すらない中学生一人を拉致監禁し、四人がかりで散々にいたぶり、玩具にし、悲鳴さえ上げられなくなる程に衰弱したと見るや、最後の遊び道具として、ボロ切れでも引き裂くように切り刻み、命を奪い、黒いビニール袋に詰め、生ゴミと一緒にポリバケツに捨てた少年達の、それが、謝罪の言葉なのだと、そうだ。

「彼等はいずれも、深く反省しています。被害者であるA君とは学校も違い、面識はなく、彼等に計画性があつたと判断する材料は一切見あたりません。衝動的な犯行であつたと断言してよいと思います」一呼吸おいて、弁護士が続ける。「夜、夢に魘され、怯えると訴える子もあります。彼等が心に深い傷を負つてていることは明らかです。過ちは過ちとして正さなければなりませんが、彼等は未だ成長途上の不安定な心理状態にある未成年です。今後の審議においては、その点に充分に留意いただき、彼等の更正の道を探ることこそ重要であると考えます」

右手、中指の先で細い眼鏡のフレームを押し上げながら、弁護士

はそう締めくくつた。

謝りたい……？

謝りたいだと？

簡単に奪つた命、生き返るわけなどない命に向かつて、今さら、謝りたいだと……？

ふざけるのもいい加減にしろ！

奴等は知つてゐるんだ。そんなこと、できるわけがない。けれど、慈悲深い大人達の心証を良くするためには、それが一番効果的な言葉だということ。未成年である以上、法律が自分達を護つてくれる。今は捕まつても、すぐに元の生活に戻れるのだということまでも……。

申し訳なかつた？ 悔やんぢいる？ 奴等は何て簡単に、その言葉を口にするのだろう。まるで事前に用意していたかのように、滑らかに口にするのだろう。

一人息子を奪われた間富浩一の、それが正直な気持ちだつた。固い握り拳を振り上げ、壁を思い切り叩く。

押さえきれぬ感情のやり場は、他に何処にもなかつた。

素直に悔やんでいいのだから、……少年なのだから、更正の道が示されるべきだ。彼等は十分に更正できる可能性がある。その芽を摘んではいけない。少年だから。……子供だから。

そんな簡単な言葉で片付けられてしまう程に、人一人の命は、……息子、啓太の命は、軽いものだつたのか？

それなら、いつそ蔑んで、恨み辛みの言葉の一つも聽かせてくれた方が余程マシだつた。殺されても仕方がないんだと、……お前の息子は生きている価値などない屑人間だつたんだと……。

無論、すぐには納得できるはずなどない。仮に、どんなに出来が悪かろうと、たつた一人の掛け替えのない息子なのだ。だが、それでも、自業自得なのだと諦めがつくくらい、罵詈雑言を浴びせられ、命を奪うという最終行動に出ざるを得なかつた自らの葛藤を、……その正当性を主張して欲しかつた。

そうでなければ、どうやって納得しろといったのだ？ 世の中に蔓延る、この不条理を。

啓太は自慢の息子だった。

幼くして母親を亡くした淋しさを、父親の前では垣間見せることさえなく、葬儀の日でさえ気丈に微笑んでいた。刑事という危険な仕事をし、父親らしいことなど何もしてやれなかつた俺に、何時かはお父さんのような正義の味方になるんだ、などと健気な言葉さえ掛け、挫けそうな背中を押してくれた。彼が居てくれたから、妻を失つた後、自分は今日まで頑張つてこられた。そう胸を張つて言える、勿体ないくらいの孝行息子。そこいらの道楽息子なんぞより、人間として遙かに優秀だと心から誇つていた、たつた一人の息子。友人と遊びに行く時も、部活の合宿にいく時も、父親の栄養管理を気遣うような優しい息子。少なくとも、犯人の少年達よりは遙かに生きる価値があつた大切な息子。それなのに……！ 啓太の命は奪われ、一度と再び俺の手許には戻つてこないというのに、お前達は生き、保護され、庇われ、そして、何時か全てを忘れて、再出発という名の許に、これから長い人生を生きていくというのか？ その権利がなぜ啓太には与えられない？ 同じ人間として、なぜ……？ なぜ！ そんなに簡単に申し訳なかつたと思える人の心が残つてゐるのなら、悔やむ心が残つてゐるのなら、どうして一瞬、……？ そう、ほんの一瞬だけ躊躇つてはくれなかつたのか！ 躊躇つてさえくれたなら……、弁護士が言う、奴等の心にもあるはずの人間の心に、『あの時』気付いてくれたなら、息子は、せめて命までは奪われずに済んだかもしだれないのに。

父として、俺にはもう悲しむ役しか残されていないのか？ 哀しみ、涙する役しかないというのか？

啓太には、なぜお前達は僕の命を奪つたのだと、僕がお前達に何をしたのだと、そう文句を言つ権利どころか、時間さえ与えられなかつたというのに……！

現代社会は公平なんじやなかつたのか？ 法律は万人の前に公平正大であるべきなんじやないのか？ 少なくとも、俺は息子にそう教えてきた。

悪いことをすれば罰せられる。良いことをすれば、いつかは報われる。 そう教えてきた。 なのに、眞実の世界つてヤツは、余りに不公平すぎる。

なら、俺だつて、もぎ取つてやる。啓太が与えられてしかるべき権利を、啓太の代わりに、俺が、この手でもぎ取つてやる！

そして、公衆の面前で叫んでやるんだ。俺は悔やんではいない。申し訳ないなどと、一度たりとも考えたことはない。謝る言葉なんかない。なぜなら、俺は奴等が憎かつた。俺から大切な息子を奪つた奴等が憎かつた。だから殺そうと思った。だから、殺したんだ！

……と。

奴等にも両親がいるだろう。彼等は、そんな俺を見て、俺の言葉を聞いて、なんと思うだろう。憎いと思うだろうか。バカげていると思うだろうか。狂人だと、思うだろうか。……もしかして、同じ子供の親として、俺を哀れむ気持ちが心の片隅に僅かでも芽生えるだろうか……？ フツと冷静になり、次の瞬間、そんなことを考えた己に向けて苦笑を投げる。

あるわけがない、そんなこと。

誰だつて、自分と同じように、他人のことを考えられるはずなどない。俺だつて同じだ。そのことを嫌というほど思い知らされたくない。俺は何を期待しているんだ？ 無駄なことだ。世の中は、不公平なのだから……。

数年後……。

間宮浩一は、とあるゲームセンター横の裏道に佇んでいた。

我が子を護りきれなかつた一人の父親として。

…… 独りの、犯罪者として。

両の手にべつたりと纏わり付いた鮮血をハンカチで拭いながら、足許に倒れ伏す少年を見下ろす彼の視線は、冷ややかなものだつた。足許に、どす黒い血溜まりが徐々に広がつていく。群衆のざわめきと、パートカーのサイレンの音を遠くに聞きながら、間宮は皆太を失つてから初めて、口許を歪めた。それが笑みだつたのか、はたまた別の感情の現れだつたのか、それは間宮本人にさえ解らなかつた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6575a/>

桜の名残を

2010年10月8日15時20分発行